

TSKの意外な納入実績 ～旧樺太製糖 豊原工場～

昨年某日、当社中丸社友より「当社施工の製糖施設について論文を執筆した大学の先生がいらっしゃる」との情報を入手しました。これは詳しく伺いたい!と早速論文を執筆した辻原先生へインタビューを申し入れました。

旧樺太製糖 豊原工場を調査して 熊本県立大学 環境共生学部 准教授 辻原 万規彦

月島機械のマイクロ室に眠っていた樺太製糖の仕様書3種と図面105種のうち12種をスキャンさせていただいたのは2004年春のことでした。それから8年以上も経ちましたが、2012年8月に、ようやく旧樺太製糖の豊原工場を訪れることができましたので、ご紹介いたします。



▲旧樺太製糖豊原工場全景 (現在の様子)

現在のロシア連邦サハリン州の南半分にあたる樺太は、戦前は日本が統治

しており、行政機関として樺太庁が置かれていた。昭和10(1935)年に始まる「樺太拓殖15ヶ年計画」によって、農業の振興のために甜菜の植え付けが奨励され、同年、明治製糖2/3、王子製紙1/3の出資で、樺太製糖が設立された。樺太庁は、将来的には少なくとも3ヶ所に製糖工場を建設する計画を立てていたが、まずは、樺太庁の置かれた豊原市の北に、裁断能力600トンをもつ「豊原」工場が建設された。樺太日日新聞の当時の記事によれば、機械設備の製作と施工は月島機械、パルプ機械一式は函館船渠、汽罐は汽車製造(タクマ式)、発電機は石川島造船所が担当した。工場の建物そのものは大倉土木(現大成建設)の施工と推測されている。豊原工場は昭和11年秋に操業を開始して、当初の4年間は年間およそ3,000トン程度を生産した。昭和15年以降は産糖量が急激に減ったが、それでも昭和20年まで操業を続けた。しかし、結局、終戦までに操業したのは豊原工場のみであった。

今回は、サハリン州文化省のご厚意で、月島機械に残る図面と現在の様子を見比べながら工場の敷地内を調査する。現場で見たことを合わせると、当時の人々の生活が3次元で想像・妄想できます。もちろん論文にするときは、妄想めいたことは書かずに事実だけを書きますが、イメージがあるのとないのではだいぶ違うと思っております。

— 現地調査へも行かれたようですが、何か調査のポイントはあるのですか？

社宅街の構造は、図面である程度わかります。しかし雰囲気や高低差は現場に行かないとわかりません。図面と現場で見たことを合わせると、当時の人々の生活が3次元で想像・妄想できます。もちろん論文にするときは、妄想めいたことは書かずに事実だけを書きますが、イメージがあるのとないのではだいぶ違うと思っております。

— 現地調査で大変だったこともしくは印象に残ったことを教えてください。

サハリンはかつて社会主義であったためか、今でも宿泊先も含め旅行の全日程を開示しないとビザが発行されません。また見学は、他の国と違って事前に在ユジノサハリンスクの領事館にお願ひして、その後、文化省に話を通し、大臣が承認してから訪問・見学の許可がおりるため、時間がかかりました。

— 弊社の印象および弊社への要望がありましたら聞かせてください。

月島機械は歴史をすこ

辻原先生へのインタビュー

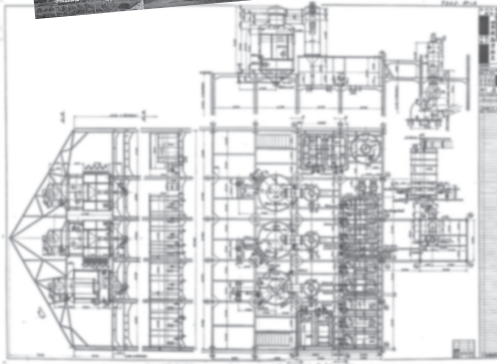
— 辻原先生の研究対象および製糖工場の研究のきっかけを教えてください。

製糖工場の研究のきっかけですが、昔日本の委任統治領だった南洋群島の建物を研究していると、「南洋興発」という製糖会社に出会いました。そこで製糖工場を中心にできあがった「街」の研究に面白さを感じ始めたのです。工場そのものというよりは、工場を取り囲む「街」というのが興味のあるところです。

※南洋群島：サイパン、パラオなど今で言うところの南国のリゾート地

— 製糖業の社宅街にはどんな特徴があるのですか？

製糖は季節ものの産業なので、他の産業に比べると社宅居住者の入居実態が季節により伸び縮みします。



▲当社が提供した図面



▲現地調査での写真 (左が筆者)

— 実は当社は年末に本社を移転する予定です。移転に向けて図面、資料の整理を行っています。将来にも有用な「技術資産」を喪失しないようにしたいと思っております。

私たちが引き継ぎ、また、私たちができなくても次の世代が研究をすることができそうです。今後も研究の際にはお世話になりたいと思っております。本日はありがとうございました。

— こちらこそ、現役世代が知らない当社の実績をご紹介いただき、誠にありがとうございました。

なお、旧樺太製糖豊原工場は、当時の明治製糖士別工場と同型の姉妹工場と言われており、この士別工場では、日本甜菜製糖が引き継いで、現在でも製糖が行われている。